堕ちていく白百合　II

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19374423

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻受け, エクボ, エク霊, 守エク霊

EntsCat様（user/11852202）とリレーエロ小説作りました！
やっほーい！！
今後も続きますので、ぜひ読んでいってくださいね！
エンツさんの所でもお読みいただけます！

そしてひよたまさん（user/39563383）からめっちゃ素敵なファンアートいただきましたぁぁ！（掲載許可済）
ありがとおおお！！

【堕ちていく白百合】とらのあなで通販中です！
文庫本/416P/R18
pixiv掲載本編＋溶けない愛蜜糖＋書下ろし３編収録
ご興味のある方は下記URLよりどうぞ！
https://ec.toranoana.jp/joshi_r/ec/item/040031175393

各種捏造設定含みます。
設定＞良家に嫁いだ元・霊とか相談所所長のあらたたさんが夫を突然死で亡くして未亡人に！
悲しみに暮れ一人で自分を慰めたりして旦那に操を立てていた！
せっかく大事に守ってきた操をぶち抜かれて悲しみと無念に苛まれるあらたた。ついでに指輪も奪われてどうしよう！と途方に暮れる様子が色っぽ過ぎてみんなが困っているぞあらたた！
一方エクボもあらたたへの気持ちと家の事情で心乱される日々！良家ならではの悩み多き状況からなんとしても思いを成就させたく

て…！
そんなある日、義母から心身休養も兼ねて仏壇の掃除を依頼されたあらたた。綺麗に仕上げたところで、突然エクボが部屋に入ってきて…？！

家柄とか、裏側とか…
そんなの関係なく愛しあえれば、よかったんだ…
（※こんなシーンは出てきません※）

和装×生肌×仏壇×背徳感×大和撫子×兄嫁NTRの特盛大サービスのエロでございます。

登場人物
霊幻新隆＞良家の奥様。28歳。最愛の旦那を突然死で亡くし未亡人に。和装女装美人。良家の奥様らしく言葉遣いはお上品に。
九下部笑窪（エクボ）＞誠司の弟。35歳。道楽息子で兄と比較されて誠司に嫉妬している。霊幻を手籠にする係（えっ）
九下部誠司（モブキャラ）＞霊幻の最愛の旦那様。逝去済み。思い出程度に出てきます。

以下内容がふんだんに織り込まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。
霊幻がめっちゃ奥様
霊幻が美人（美丈夫か）
霊幻が常に和装女装で浴衣も女物着ています
エクボがちと横暴よね（それがそそるよ）
エクボがNTRぶちかますぜ
喘ぎがかわゆすかわゆす

上記ご参照の上、お読みくださりますと幸いです。
感想などいただけますともれなく椅子から転げ落ちるほど喜びます。

その際はぜひマシュマロご活用ください。
この度はご覧いただき、誠にありがとうございます。

Table of Contents

堕ちていく白百合　II

※※※Ｋパート※※※

あぁ、今日も新しい一日が来たのかと、新隆は目をうっすらと開けて、白む部屋をぼうっと眺める。
自分の判断の甘さで義弟に破られた操と、奪われた夫婦の誓いの銀環。それらの事実が、九下部家現跡取代理としてここに存在する己の意味を、まるでドアを激しく叩くかのように自分に問いただし、精神を鞭打ち、ギリギリと音を立てて縛り上げる。
だけれども、どんなに苦しくても、もう泣き疲れた。残念だけれども今は事実を受け止めるしかない。
寝起きの脚でふらりと立ち上がり、遺影を見つめながら浴衣を脱いで裸体を曝し、今日も衣紋掛けに手を伸ばす。
さらりと音を立てて手に触れる、濡れ羽色の深い闇を切り取ったような着物。

いきなりだった。甘い褥の中であの人が思い立って、いざという時のために簡易な喪服を仕立てよう、なんて言い出して。
縁起でもないから今はやりたくないと苦笑して、口付けを落としてやんわりと断ったのに、その言葉を押し切られるかの様に絶頂へ導かれて反抗する気力をすっかり削がれて、その日のうちに呉服屋を呼んで、気怠いまま採寸をして。
着物が仕上がって、その神々しいまでの深みのある黒にうっかり見惚れて感嘆の声を上げた貴方は、あっさりと魂の寝首を掻かれて逝ってしまった。忘れもしない。心尽くしの喪服が届いた、その翌日の事だった。

する、とその着物を掌で撫でる。でも、その闇と自分の肌が交わることは決して無い。
この闇の向こうに、あの人がいる。そう思いながら日々着付けをする。

命を失ってしまってから、無事にあの世に行けただろうか。道に迷って途方に暮れていないだろうか。
あの時俺が、もっと強く断っていたら、貴方は死なずにいただろうか。
そんなことばかり考えて、悔やんで、答えのない問答に一人で頭を抱えている。
不安だから、愛しているから、せめて貴方が好きだと笑って手指に絡ませたこの蜜色の髪の毛が、貴方の向かう先の案内灯として役立てばいい。
こんなことになってしまったけれども、せめて罪滅ぼしにでもと、今日もキリ、と帯を締める。
本当は、もっと泣きたかった。

男体でも、新隆に合うように仕立てられたその着物は、彼を男としては魅せない。だから、ほんのりと粉を叩き、薄く紅を引く。
九下部誠司の妻として、せめてもの振る舞いをするために。

あの快楽の惨事から、数日が経った。
新隆はすっかり食欲を無くしてしまい、何をするにもぼうっとしている。ふとした時に伏せたまつ毛が彩る瞳は、今までよりもさらに悲しげに、淡く消えてしまいそうな美しさを湛えてしまっている。元々美丈夫であった新隆はその様相に相まり、上塗りされた儚さ故に危うい色を増していた。ため息を吐くごとにえら下から顎下へと続く線が柔らかく影を落として、白いうなじを強調し、見る者たちの目を奪うようになっていた。そのあまりの様子に義母が不安を覚え、思わず声をかけた。
「新隆さん」
「奥様」
急に廊下で声を掛けられて、いつもなら咄嗟に微笑みを返すくらい訳のない新隆だったが、その時はどうにも機転が効かず、ぼうっとした反応しかできなかった。振り返り、小首を傾げて発せられる言葉を待つその表情は、霞のように儚かった。

「あなた、どうしたの？ここ数日見ていたけど顔色がおかしいわ」
心配そうに顔を歪めて見つめてくるその眼差しが、新隆には眩しくて痛みすら伴い、思わず目を眩しげに顰めてしまう。この人はいつだって優しい。自分には勿体無いくらいに。
「ご心配をおかけして申し訳ありません。お心を砕いていただき、ありがとうございます」
少し口角を上げて笑顔を作る。だが義母はその様子を見て、やはり何かがおかしいと察したようだった。
やんわりと左手を掴まれて、温かな両掌で優しく包まれる。そして義母に気づかれる。
「そう、あなた・・・指輪を無くしてしまったのね」
「ッ！」
はっとして義母を見つめてしまう。その表情は図星だと言わんばかりに目が見開かれていて、義母は優しく微笑んだ。
「お辛かったでしょう。わかるわよ、大切にしていたものね」
「・・・奥様・・・」
本当は違う。だが、そんな事口が裂けても言えない。
あなたの息子に、強奪されたなんて。
思わず薄く紅を引いた唇をきゅうと噛む仕草をしてしまう。無念だった。
「ちょっといいかしら？」
眉尻を下げて笑う義母が断りを入れて、新隆に少し膝を曲げるよう指示を出す。意図がわからないままそれに従う。すると。
「よく頑張ってきましたね」
ふわりと香る、芳醇な白檀。新隆の視界は、浅葱色のなんとも上品な和装生地で塗りつぶされる。
義母の胸に優しく抱き止められ、蜜色の頭を撫でられる。まるで愛しい我が子を愛でるかのように、小さな掌で何度も何度も、よしよしと撫でられるのが少しくすぐったくて、気持ちいい。
「あなたは3人目の息子だと言ったでしょう？それに、誠司の大切な人よ」
静かな口調で降りてくるその言葉はとても心地よく、鼓膜に響く。
じんわりと温かく、虚な心へ灯りを灯されるかのようだ。

「私には誠司は息子だから、我が子を亡くしてしまったの。新隆さんとは立場がまるで違うけれど」
でもね、と小さくため息をつきながら、義母は優しく言葉を紡ぐ。
「大切な命を亡くしてしまったことは、お互いに比較なんてできないでしょう？」
「・・・・はい・・・」
「だからね、辛い時は辛いって言っていいんですから」
それは仏の温かな光のような言葉に聞こえた。心底ありがたかった。染み渡るその言葉が、なぜいまここで新隆に注がれるのか。
この人の心尽くしの言葉を、もっと早くに聞きたかった。
タイミングが悪すぎる。
義母の背後、廊下の突き当たりの曲がり角の壁から覚えのある黒髪がのぞき、立ち聞きをしているのが見えていた。
だからぐっと拳を握り締め、耐えるしかない。
そう、ここはエクボの家でもあるのだから。
「ありがとうございます、本当に勿体無いほどのお気遣いをいただいて」
抱擁をありがたくいただき、義母に心からの感謝を述べる。
「指輪はちゃんと探します。誠司さんから頂いた、大切なものですから」
「そうね。私たちも見つけたら新隆さんにお伝えするわ。一緒に探しましょう」
「はい」
あとちゃんと食べなきゃダメですからね、と優しいお小言を喰らう。
「今日は少しお休みなさいな。あとでお部屋に昼食を持って行かせるわ」
「い、いえそこまでしてもらうわけには」
「新隆」
はあ、とため息をつき、義母が新隆を名前で呼ぶ。そして両腕をがし、と掴んで母の顔で叱咤する。
「今日は、休みなさい」
「・・・・・・」

母からの命令です、と有無を言わせぬ強さを見せつけられ、思わず押し黙ってしまう。
「とは言ってもあなたのことですからね。じっとしてないでしょうから、好きなことをすればいいわ」
「はぁ・・・」
「どうしてもと言うなら、仏間のお仏壇だけお掃除と、お花を供えてちょうだい。誠司も喜ぶわ」
奥で不躾に立ち聞きをしていた黒髪が消える。気配が消えて、心臓が鷲掴みにされたようにシクリと痛む。
同時に、この状況はもうわかりましたと言う選択肢しか与えられていない確定ルートだ。でもこれも、義母なりの心遣いだと理解できる。それを無下にするわけにはいかないだろう。
「・・・わかりました。本当に何から何まで」
「いいのよ。何かあれば遠慮せずに言いなさい」
優しく微笑んで、ゆったりと踵を返して上品に立ち去っていく義母。その足取りとともに白檀の残り香が消えていくにつれて、新隆の不安と闇を煽る。
そのように言ってくれるなら、せめて今日一日は、そばにいて欲しい。怖い。
だが、そんなことは口が裂けても言えるはずがない。口外すればこんなもの、単なる恥辱に他ならないのだ。
全ては自分が甘かったせいだと、悔やむしかないのだと、ひたすらに行き先のない懺悔を胸に抱えたまま、新隆はするりと足袋の衣擦れの音を立てて、廊下へ歩みを進めていった。

※※※EntsCatパート※※※

「どうぞ、若奥様」
お手伝いさんが運び入れてくれた食事に新隆は精一杯の笑顔を返す。
３つの御膳にいっぱいの、見事な懐石料理。
美味しいのは分かっている。でも……いつも夫と舌鼓を打っていた料理を１人で食べるのは、せつなくて。

「あれ？これは……」
そんな中に混ざる、安っぽいたこ焼きの舟。
「あ、奥様から差し入れでございます。たまにはそう言うものも食べたいだろう、と」
霊幻は泣きそうになった。
大事な弟子と何度も口にしたファストフード。大事な思い出なのだと夫に何度も語っていた。義母は夫から聞いて知っていたのだろう。
食の進まない中、たこ焼きだけは食べることができた。結局元々庶民舌の新隆には、弱っている時には食べ慣れたものが助かった。
少し元気が出てきた時に。
「……笑窪だ。ちょっといいか」
襖の外から声をかけられて、はっと新隆は息を呑んだ。

※

少し前。九下部家当主、執務室にて。
「なんだよ親父、話って」
「笑窪か。入れ」
パーティーの招待状に『出席』の丸をしながら、新隆の義父はのんびりとした声を上げた。
「笑窪、お前、また誠司のものを欲しがっているだろう。まったく、その悪癖はなんとかならないのか」
初老の当主の鋭い目付きに、エクボはどくりと心臓を跳ねさせた。
「どうだ、笑窪。新隆を妾にするつもりは無いか？」
「……は？」
「私から説得してみよう。新隆も九下部家で居場所ができる。お前も新隆を手に入れられて嬉しいだろう？」
「ふざけるなよ！」
エクボは立ち上がって当主を見下ろす。
「結局アンタは、俺の欲しいものなんて、小さい時から分かっちゃいねえんだ！」
お前は頭がいいね、と頭を撫でる温かい手。散歩に行こう、と差し

出される手。落ち込んだ時に、優しく背を撫でる手。
それだけで良かったのに。たったそれだけが、欲しかったのに。
『お前は次男なのだから、九下部家を支えるためにはこんな成績では役に立たない』『なんだ、居たのか』『うっとうしい、慰めて欲しいなら女のところにでも行け』跡継ぎの長男への優しさのひとかけらでも、エクボにも与えてくれていたのなら。
エクボもここまで捻くれた人間にはなっていなかった、と自分自身でも思う。
当主であるこの男は、恐ろしいほど合理的であった。政治家や富豪と社交界で接しなければならない長男は、人好きがするように甘やかして、柔和な性格に育てた。跡継ぎのスペアではあるが、おそらくゆくゆくは九下部の分家に過ぎない立場になっていくエクボには、『格下』としてのわきまえを叩き込み、本家の役に立つような能力を求めた。
エクボは応えようとした。だが、生来の勝気な性格が邪魔をした。最初は、『兄より出来て当然、出来なければ出来損ない』と言われる生活に必死に耐えた。ある日、体調が悪くて、テストで悪い点を取ってしまった。必死に言い訳をするエクボに、父が言い放ったのは『出来損ないめ』の一言だけだった。
ぷつん、と張り詰めていた糸が切れた。
エクボは努力するのをやめた。友達の家に入り浸り、漫画やゲームを覚える。
大学に入ったら女遊びを覚えよう……として、失敗した。彼女と付き合った時に、『家の格が足りないからお前とは結婚はできないんだけど、セックスはしたい』という話をしなくてはならなかったからだ。そんなことを言われて怒らない女性はいない。少し付き合って、すぐ別れて。そんなことを繰り返すうちに、恋愛よりもエクボは賭博にハマった。とはいっても友人間での賭け麻雀だが。酒と賭博で大学生活を潰したエクボは、父の希望を蹴って政治家にはならず、そのまま無職になった。家でしばらくぶらぶらして、それからちょっと変わった仕事をするようにはなったが。
そこでチラッと噂を聞いたのだ。『霊とか相談所』のことだ。興味を引かれた。だから倉から適当な壺を持って行って、この壺を片付

けようとすると良く無いことが起こる、と嘘をついて訪ねてみて。ほとんど一目惚れだった。
「そもそも、今回は兄貴が俺のものを欲しがったんだ――！！」
もの凄い美人だったというわけじゃ無い。でも印象に残る容姿だった。胡散臭さを隠そうともしないが、一所懸命な男で。話すとふっと心が軽くなる。そんな力を霊幻新隆は持っていた。
エクボ自身もまさかだったが、男相手に本気になってしまった。その話を家でしたら、大騒ぎになった。
エクボは九下部家の政略結婚の道具でもある。そんなどこの馬の骨とも知れない、しかも男と真剣に交際されては困るのだ。
『そんな怪しい男、財産目当てに騙されているのではないかい？』
そう言って心配して、こっそりと霊幻新隆の顔を見に行った誠司――兄が。夢中になってしまったのだ。霊幻新隆という男に。想いを自覚してからの誠司の行動は速かった。あっという間に新隆を口説き落とし、驚き反対する父母を跡取りの立場の強さから黙らせ、あれよあれよという間に結婚してしまった。
ああ見えて、九下部家の長男として、誠司は強かで恐ろしい男であった。
誠司は新隆と結婚してから九下部家内に目を光らせ、新隆を害そうと言う動きを察知すればすぐさまそれを握りつぶし、首謀者への報復を怠らなかった。
誠司を恐れ、父母は新隆を大事にせざるを得なかった。実際に接してみると新隆は中々の人たらしで、父母も新隆の存在そのものはよしとするようになった。
誠司はエクボの想い人を横取りしたことを良く理解していた。エクボに家と土地を与えて本家から追い出し、なるべく新隆と接触しないようにしてきた。エクボとて、誠司と新隆が目の前でイチャイチャするのを見るのは耐え難い。憎しみと悔しさを抱きながら、エクボは本家を去った。
「俺様が欲しいのは妾じゃねぇ。俺が欲しかったのは――！」
エクボの唇がわなわなと怒りで震える。脳裏によぎる、仲睦まじく庭を散歩する２人。本来なら、その新隆の隣にいるのは、自分だったのだ。

「……新隆は誠司を好いている。いまだにその気持ちは変わっとらん。この間なぞ、白い喪服を作りたいと言ってきて、難儀した」
エクボは息を呑む。そこまで、誠司が好きか、と。
「新隆の身体は手に入っても、心は手に入らん。お前に嫁ぎはしない。できて妾までだろうよ。諦めろ」
「うるせぇ！そんなこと、親父が決めるな！」
エクボはがちりと拳を固く握りしめる。
「あいつは俺が手に入れる。誰にも渡さねぇ。兄貴にもだ！……新隆が俺に堕ちるところを、アンタは黙って見てろ」
「……」
当主は感情の読めない顔で、じっとエクボを見つめている。
「……それと、そろそろ跡継ぎとしての仕事をし始めなきゃいけねぇ。兄貴の部屋に入るぞ」
「あぁ。頼んだよ。それなら今度の××先生のパーティーにはお前も顔を出しなさい」
「へいへい」
エクボは当主の執務室から出て、ニヤリと笑う。当主はこれまでと比べて大分態度が軟化した。跡取りになるだけでここまで変わるものか、と可笑しくなる。
「さてと、兄貴の部屋に行くとするか」
新隆がいるであろう、誠司の部屋に。

※

「何の御用ですか」
緊張した声で新隆がエクボに返す。
「兄貴が残した書類に用がある。アンタに用は無ぇよ」
「……」
警戒しながらも新隆は襖を開く。
「今、俺はシラフですからね。何かして来たら一本背負いで庭までぶん投げますから」
跡取りにそう言い放つ新隆に、思わずエクボは大笑いしてしまう。
「やっぱいいな、アンタ」

ダメなことはダメと、相手が誰だろうと言える。それは得難い美徳だ。あの怖い誠司が新隆に叱られてるのも見たことがあったのをエクボは思い出して微笑んだ。
「……！」
その慈愛に満ちた優しい顔を見て、新隆は誠司を思い出す。
と、同時に、忘れていた何かが、記憶の底から、湧き上がってくるような気がした。
「エクボさ……」
「親父が、俺にアンタを妾にしないか、って言って来たが、アンタは了承してんのか？この話」
「……！」
新隆は絶句する。
「そんなことをなされるのなら、俺はこの家を出ます。霊幻の姓に戻って、何か商売をして暮らします」
「安心しろよ、俺は断ったから。……俺はアンタを娶るつもりだからな、妾にはしない」
「……はあああああああ！？」
「それにしても新隆、お前本当に兄貴に甘やかされてたんだな。この家から出たら、すぐ蛇どもの餌食になるぞ」
「いやちょっと待っ……え？」
エクボは誠司の文机の引き出しから、暑中見舞いの葉書を取り出して机に広げる。
「それは……」
いくつか、新隆もどこかで見たような名前の差出人がある。
「こいつらは、九下部家からの献金が無いと政治家を続けられないやつらだ」
新隆は息を呑んだ。
「こいつらは九下部家ともっと密に繋がりたくて堪らなくて、チャンスをいつでも狙ってる。ウチの両親が溺愛してるお前なんか、お近づきになりたくてたまらないだろうな、どんな手を使ってでも」
「そんな……」
「それに、九下部家と縁を持ちたい落ちぶれ旧華族なんか山ほど居るんだぞ。例えお前が九下部の名を捨てて、この家に近寄らないよ

うにしたところで、お前が誠司の嫁だった事実は消えないし、お前が俺の両親や俺に口利きできてしまうことは変わらない。……利用価値がありすぎるんだよ、もはや」
新隆は考えたことも無かった。いや、正確には、そういった事情からは、誠司によって意図的に引き離されて暮らしていたのだ。
「お前、九下部家がどうやって暮らしてるのか、それも知らされてねぇだろ？」
「えっ……アパートやマンションを貸し出して暮らしているんじゃ……」
これらの物件は九下部家の持ち物だ、と誠司に教えられ、賃貸会社とのやり取りを実際に新隆は手伝っていた。駅前の物件ばかりを２０戸も持っているなんて、お金持ちなんだなぁなんてのを考えたのを憶えていた。
「それだけでこんだけデカイ屋敷とここら一帯の山を維持できるワケねーだろ。九下部家は銀座や六本木の一等地に結構な数の土地を持ってる。それを大企業やベンチャーに貸し出せば、あら不思議、年間１００億の売り上げの出来上がりだ」
「ひゃ……！」
「税金でだいぶ持っていかれるけどな。それだけじゃねぇ。外貨も安い時に買い漁って、最近売り払って随分と利益を上げたりとか。他にも色んな事業に出資してる。流石にこのへんになってくると親父しか詳細は分からないが……」
「す、凄いお金持ちなんですね……」
「何他人事みたいに言ってんだよ。アンタも誠司が持ってた現金を相続してんだからな？」
「えっ」
はぁ、とエクボが心底呆れたような声を出す。
「アンタを甘やかしてたのは兄貴だけじゃねぇな？親父もお袋も弁護士任せにしてアンタが怖がらないように黙ってたな、さては」
「あ、あの、誠司さんの遺産、って……」
「主には現金だが、どんだけ安く見積もってもアンタが相続するのは、１０億は下らないはずだ」
新隆は絶句する。

「金目当てに人殺しが行われる額だ。アンタ下手に一般人と結婚したら、階段から突き落とされかねねぇぜ？少なくともそれぐらいの資産はあるような名家と結婚した方がいいだろうな」
「……お金、いらないです。九下部家にお返しします」
「馬鹿、贈与税いくら掛かると思ってんだ、勿体ねえ。とりあえず持っとけ」
憂鬱そうに俯いて、きゅっと新隆は手を握る。
「……私がこの家にいるには、あなたの妾になるしか無いのですか」
「いいや？お袋がお前さんのことをめちゃくちゃ気に入ってるし、そのまま居れば良いんじゃねぇの。それにそのうち俺様の嫁になるんだから、問題ねぇだろ」
「何を、ふざけて」
「何もふざけてねぇよ。この間の責任を取るだけのこった。……こんなもんだな、じゃあ失礼するぜ」
誠司の文机の引き出しから書類や手紙を回収して、エクボは部屋を出て行く。
「……ふざけてる」
何もかもめちゃくちゃな人だ。突然娶るなんて言い出すから、とうとう新隆は指輪の事を言いそびれてしまった。
「こちとら警察に突き出してもいいんだぞ」
誠司が大事にしていた九下部家の名に傷が付くから、やらないけど、と新隆は心の中で付け加える。
はあ、とため息をついて。
「……お仏壇の掃除しよ」
新隆は仏間に向かった。

※

新隆の背丈と変わらない大きな仏壇だが、元々毎日掃除してるものだ。掃除は一瞬で終わった。だけれども、誠司の好きな白と黄色の菊を供えて、さっぱりした仏壇に、夫の写真を置き直すと、どこか心が落ち着くのを新隆は感じた。

線香を燃やして立て、りんを鳴らして新隆は手を合わせる。
かたっ、と襖が開く音がして、目を開いた。
「エクボさん」
目を合わせて、ハッとする。
その目にはハッキリとした情欲の色が浮いていて、エクボはたんっと音を立てて襖を閉めた。
咄嗟に霊幻は庭側に逃げようとしたが、エクボに手を掴まれてその胸の中に引き寄せられてしまった。
「やめてください！巴投げしますよ！！」
「ほんっとおもしれぇな、アンタ。なあ新隆、指輪、返して欲しくねぇか？」
新隆が硬直する。
「か……返してくれるんですか？」
「ああ。新隆が『誠司さんよりもエクボの方が好きです』って言えたら、返してやる」
絶句した。
「……せ、誠司さんよりも、エクボの方が……」
新隆が俯く。
「……言えません……」
「なら指輪はお預けだな。今日は俺は夜は忙しくてな。伽は今してもらおうと思ってな」
「何を、勝手なことを！」
「本気で嫌なら、俺を引っ掻け」
「えっ？」
「好きだ、新隆」
真剣なエクボの告白に新隆は固まる。
新隆は真っ直ぐな想いを、軽んじれる人では無かった。
だがエクボはすぐにニヤっと悪い顔で笑って新隆の胸の合わせに手をかけて広げた。
「喪服って何でこんなにエロいんだろうな」
「はぁっ！？ちょっと、やめ……っ」
「なあ、哀れな片想いの恋狂いを、慰めてくれよ、義姉さん」
渋い声で耳元で言われて、思わず新隆の腰が砕けそうになる。なん

て官能的な声を出すのだ、この男は、と思わず新隆は耳を押さえて
エクボを睨みつける。
「今晩は新隆を慰めてやれねぇんだ。今いっぱい咥えとけよ、
な？」
「何をめちゃくちゃなことを……っぁ」
裾を少し割開かれ、エクボの腿で性器を押し上げられて、色の混
じった声が出た。
「言ったろ。嫌なら引っ掻け」
何故か震えて力の入らない手で、かろうじて新隆はエクボの胸を
引っ掻く。
「なんだそりゃ。もっとしっかり引っ掻かないと、止めてやれない
ぜ」
どさ、と新隆は畳に押し倒される。とうとう喪服の裾は完全にはだ
けて、白い手触りのいい足を無防備に曝け出した。
「あっ、そんな、嘘つきっ」
両手を畳に縫い止められて、新隆がみじろぎして暴れる。
「嘘じゃねぇよ、ほら」
ぱっと左手を解放して、エクボは代わりに新隆の半勃ちの性器を
握って親指で先端をさするように撫でる。
「あっあ、あぁっ、やめて……っ」
この間の快感を身体は思い出して、期待に反応してしまっていた。
新隆は悔しそうに、力の入らない手でもう一度エクボの胸を引っ掻
く。
「おーおーおー、もうカウパーで後ろまでぐちゃぐちゃじゃねぇ
か。ほら、指を簡単に呑み込んで……はは、美味そうだな？」
「……っ、！？あ、や、やめて……っ！」
エクボの長くてゴツゴツした指が、新隆の前立腺を捉えた。

※※※Ｋパート※※※

「い・・・ッ！あ、ぁ！」
グリ、といきなりにしては強めに抉られて、それに伴い曝された太
腿がびくりと跳ねる。人の指とはいえエクボの手は大きくて指が長

く、同じ男性である新隆でさえも見惚れてしまうほどの男らしい手つきをしていた。そんな手から生える雄の色香を放つ中指が、新隆の雌の部分を容赦なくぐりぐりと姦する。正直なところその指癖は、誠司のものよりも穴に馴染み、指で触れられるところから肉体に落とされる感触も、まだ回数も重ねていないのに新隆に驚くほどの甘い痺れを施して、乱していく。とにかく触れられたところが全て心地よく、全てが絶頂へと誘う正確な道標としてがつんがつんと確実に打ち付けられていくのだ。
数日前に体感させられたあの感覚も、酒が入って不自由だったとはいえ、本当なら強姦なのに感じてしまったのは事実。二人の荒ぶる男体を快楽の肉鞘として懸命に収めたその身が、はじめて言葉にできる感覚だ。
これは多分、身体の相性がいい、というやつではないだろうか。
いや、と新隆は自分の思考を推敲して顔を青ざめる。そんな末恐ろしいことをよく自分はこの状況下で考えられたものだ。
「おい新隆、集中しろよ。夜はできねぇって言ったろ」
新隆の様子を見て、怪訝そうな声をあげるエクボ。そして前立腺への刺激を加えるために、指を一本増やしてきた。ずぬりと無理やり侵入してくるもう一本の長くて太い指が、また腸壁に馴染んでぐにぐにと弄ってくる。
「や・・・め、てぇ・・・ッ！と、伽なんっ、て、そもそも、おれ、ッ」
「あ、俺って言ったな？奥様のくせに」
クスクスと笑ってエクボが指の力を強めてくる。誠司に甘く鍛えられたその前立腺がふくりとエクボの指に当たり、どんどんと硬度を増していく。
「おいおい、硬くなってきてるぞ？感じてるなら素直にそう言えや」
「ば、かですかッ！そんな」
そんなこと。・・・そうだ、こんなこと。
あの人は、誠司はそんなはしたないことさせなかった。それに、こんな煙草の香りだってしなかった。
それが今は、煙草の香りを少し甘く感じてしまって、何故だ。

俺に何が起きている？
「ぃやッ・・・！・・・話を！んっ・・・あ、ぁあ！」
また指を増やされる。これで３本目だ。指の股までずっぷりと呑み込んだ穴が、指の皮膚を介して悦んで蠢くのをエクボに伝えてくる。だがエクボにはわかっていた。これはあの、誠司と自分を勘違いした時の蠢きには程遠い。
自分を見て欲しい、その一心で執着からしつこいほどにその雌の膨らみをゴリゴリと強く抉り続ける。
「あぁ！だめ・・・ッやめ、・・・て、くだ、さ・・・っ！！」
そうは言いつつも前立腺は硬く自己主張をし、さらに嬲ってほしいと言わんばかりに膨らみを指に擦り付けてくる。同時に新隆のペニスも着物の合わせの間から大きくそそり立ち、その布地をどんどんと押しのけていくのが目視でわかるほどになってくる。濡羽色の喪服からのぞく純白の襦袢が、立ち上がるペニスの脈動に合わせて薄い生地の裾をふるふると震わせた。そんな状況がエクボの眼前で繰り広げられているのを新隆は自分で理解していない。アナルを弄るその腕を両手でひしと掴んで爪を喰い込ませる。彼なりの抵抗の意思の現れだ。
「まぁとりあえず、一度イっちまえ。可愛く鳴けよ？」
俺の嫁御殿、と吐息を交えて耳元で低く囁いてやる。そして、３本の指で前立腺をごりごりと押し潰した。
「は、ぁ！ぁ・・・ンッ、ぁ！あぁああ！！」
ごちゅ、と一際強く揉まれて、電撃のように発せられた腰への重い快楽が破裂した。ビクビクと身体をしならせて暴れ、強制的に絶頂に突き上げられた。同時に彼自身が、肩で息を吐きながらペニスの先端にねとりとした感触を覚えて、悔しげに目をギュッと閉じてそっぽを向き、顔を赤らめる。
「上手にイけたなぁ？」
ぬちゅ、と挿し入れていた指を抜き、絶頂の余韻に震える肉体を見やる。前立腺への刺激による深めの絶頂をいきなり体感させられたことによって、身体が重く沈んで、投げ出した脚を動かすことができないようだ。肌蹴た脚元の合わせはすっかり広がって、丸出しになったペニスの先端からは、わずかにではあるがとろり、と粘度の

高い白濁を滴らせて、漆黒に輝く絹の帯にその残滓をほとり、と落とした。大切な帯にはしたない体液を溢してしまったことに羞恥しているのを見て、エクボは気持ちが昂ってくるのを感じる。
「いいねェ。そんなにヨかったか。脚が震えてるぞ」
そっぽを向く顔の、耳たぶから続くえら下のラインがうなじを彩って、汗が一筋細い線を描いて流れていく。ゆるく角度をつけて立てられた震える膝頭がほんのりと桃色に染まって、膕を辿ってふくらはぎへ汗が伝う。その汗の伝う先には、絶頂に追いやられるまでもがいて必死に畳を滑った白足袋。ふくらはぎから続く、締まった足首からくるぶしを申し訳程度に覆う筒。足の指の股にきゅっと食い込み戒める鎌。それらが新隆の形の良い甲や踵を白でぴしりと包み隠していた。
「俺は・・・もう、いい、ですッ・・・やめて・・・！」
小刻みに息を吐きながら、上気した顔で解放を求められる。だがそれではあまりにも中途半端というものだ。
「勝手なこと言うな。伽だぞ。俺様が満足するまでだ」
「だから！伽なんてしないってさっきも！」
「指輪を返して欲しいんだろう？」
なぁ？と顔をずいと寄せてくるエクボ。またふわりと香る煙草にクラクラしてしまいそうだ。そして大切な指輪。それを身代にされてしまっては、嫌と言うこともできないなんて。
「・・・卑怯なッ・・・！」
「なんとでも言え。お前が好きだから、俺様のものになるまでどんな事だってやってやるさ」
またぶつけられる直球の告白。そして力の入らない身体。今この状況であればうまくやれば逃げられるかもしれない。なのに抵抗の力が出ない。脚に逃げたいという意志が伝わらないのだ。
ーどうしてっ？！
脳内で混乱する。なぜ、どうしてとひたすらわんわんと鳴り響いて、頭痛がしそうだ。だがそんな中でも気づきたくない僅かな変化もあって、心がざわざわと騒ぐ。認めたくない欲求と感情に負けたくなくて、新隆は必死でエクボをギンと睨みつけた。
だが、その睨め付けた先にあったのは、恋慕に歪む三白眼。ニヤつ

いてはいるし顔つきも口も名家の次期跡取りというには悪すぎる素行不良のとんでも物件なクセして、何故自分に対してそんな顔をするのか。
やめろ！と脳内で一喝して、新隆は太腿に力を込めようとした。しかし一手遅かった。
後孔にぬるりとした、覚えのある感触が塗り込まれ、じゅぬぬぬと一気に注入されて、思わず悲鳴を上げる。
「やッ！な・・・あ、ぁあ！」
「悪いな。せっかくだからよ、使わせてもらう」
おそらくは、最初からこれが目的でわざわざ懐に忍ばせて持参したとしか思えない品物。ローションボトルだった。不躾にも細く造られた注入口を菊門に直接当てがい、ラッパ飲みのように挿し入れてきたのだった。量を見ながら入れては止めてをエクボが細かく繰り返し、新隆は穴がぬるついていく感覚にただならぬ悪寒を感じてしまう。そしてその滑りの中へ、再び指が、一気に３本出戻りを果たした。
「ひゃっあ！あああ！！」
一度絶頂を迎えて感度を増したアナルが、滑りを得て指が動きやすくなる。そしてまた硬く膨らむ前立腺を捉えて、ぬちぬちと撫でて、さっきよりも強く押し潰してくる。
「やめ、て！いやっ・・・やぁ！・・・だめぇぇ！！」
頭をぶんぶんと振り、涙交じりに鳴き叫んで哀願する。八の字に眉を顰めてまつ毛を涙で湿らせて、苦しげに目を瞑っている。叫び声を漏らす薄く紅の引かれた唇は、肉体を正気に保とうとして荒ぶる呼吸を繰り返す。
「これから俺様がここに邪魔するんだ。解さねえとお前が辛いんだからな」
「いやだ！もう！やめてッ、くだ、さいぃ・・・ッ！」
3つの指の腹が膨らみを擦るたびにビクビクと腰が震え、太腿が跳ねる。ペニスを見れば、前立腺への刺激で大いに猛りを取り戻して、亀頭を期待にぬらぬらと光らせて、先端からとぷりと涎を垂らしていた。
「可愛いなぁほんとに。ちんこもいじってやるわ」

「！だめ！同時は！！」
そういう可能性が少なからずあったことを、何故今まで気づかなかったのかと思うほどに惚けていた新隆は、はっとしても尻穴に挿さった指の感覚が抵抗の邪魔をして動くことなどできない。それを良いことに、エクボの空いた手がペニスをぐちゅぐちゅと無遠慮に扱き出す。亀頭から根元までを力の強弱をつけて絶妙な加減で刺激されるので、とてもじゃないが声を抑えずにはいられなかった。
「ぃあッぁ、ああぁ！」
時折鈴口に触れる指の腹がわざとその穴を抉るようにグリと力を入れて擦り上げてきて、カウパーはその感触に悦ぶようにどんどんと溢れ出ていく。指は滑りを増して、感度と昂りを相乗効果で高めていく。どんなに嫌がっていても、肉体を守るためにそういう粘液は分泌されるものだとどこかで聞いたことがある。しかしこの感じ方と吐き出し方はそれとは違うとわかる。
「そんなにイイ声出すなよ、もっと可愛がりたくなるだろ」
低く呟いて、扱いていた手でペニスの根元を掴み、エクボが不意に亀頭にその熱い舌をねとりと這わせた。
「ッ！いやああ！」
誠司に与えられてきた時の、記憶に残るその感覚とは違うけれども、感触としては覚えのあるそれに思わず悲鳴を上げてしまう。エクボの口についに囚われてしまう時が来るなんて思いもしなかった。
「やめ、てぇッ・・・！」
とめどなくぶつけられる強烈な粘膜への愛撫に息を詰めて耐える。でもそこは確かに性器で、肉体の中で最弱にも分類される急所だ。そんなところをこんなに熱く滾った舌を使って擦り上げられたら、耐えられるわけがない。
温度高く湿った舌が根元から裏筋を通り、雁首の窪みを辿って亀頭に辿り着いて、鈴口に舌先を突っ込んでぐりぐりと抉る。その刺激に溢れ出るカウパーを味わいながら、圧力を持って舌をゆったりと這わせて絡める。最終段階として、亀頭を歯を当てないように唇と舌で柔く包み込みながら、実に美味そうにじゅぼじゅぼと音を立てて上下のスライドを始めたのだった。

「ぁん！っやめ！てッ、だめぇ！そ、れぇ・・・ッ！」
やめてほしくて鳴いて声を上げながら、股座に齧り付くその黒髪を剥がそうと懸命に引っ張る。だが引っ張ろうとして力を込めても、結局は強い快楽に耐えるために握りしめるしかできず、その白く骨ばった指に黒髪が幾重にも絡み付いていく。前立腺への押し潰しとペニスへの直接的な愛撫が重なって、新隆の神経回路はショート寸前の状態だ。
エクボのこめかみや耳、首筋や肩に、快感に打ち震えるたびにびくりと揺れる白い内股の柔肉がひたりひたりと打ち付けられて、それも彼を大いにそそる。自分が散らした燻んだ紅のキスマークが、腿が震えるたびに共にゆらゆらと揺れるのだ。なんて情欲的な光景だろうとニヤけてしまう。
あまりに煽られるものだからつい与える力の加減ができずに、前立腺を一気にゴリュ！と激しく押し潰して、ペニスへの刺激もより一層強めて、これまた激しく喰らい付き、これ以上ないほどにきゅう、と吸い上げた。
「あぁいや！でッでちゃ！ぁ！あぁーーーッ！」
エクボの頭を掴んでぎゅうと抱きしめて、身体をこれでもかと丸めて力んでガクガクと痙攣し、エクボの熱い口内に甘い欲望の白濁を思い切り吐き出した。一気に広がる匂いと、甘い新隆の味がエクボの舌を支配して、取り残しの無いようにと更に鈴口をぞりぞりと執拗に舐めて、ギュウウと吸い上げた。
「あん！！やめ！！ッぁはあ！！」
射精後の過敏な亀頭を吸い上げられて、鋭く甘美な叫び声が上がって、腰がガクガクと跳ねた。反応を見ながら責め上げ、先端を舐め尽くしたところでようやく唇を離す。上顎、舌の上を新隆の精液がねっとりと覆いつくし、それが下顎にドロリと流れて湛えられた唾液と絡み合う。エクボの口内全体を包むそれは、彼にとっては美酒の如く感じられ、甘く酔わせる。そして喉に流し込み、ごくり、と喉仏を上下に揺らして飲み下した。
他人の、しかも男の精液なんて飲みたいとはこれまで思ったことなどないし、エクボもそこまで感じてしまう相手などいたことがなかった。新隆のものだからこそ、そう感じてしまうのだった。

その様子を、射精の余韻に荒ぶる息を吐きながら一部始終見ていた新隆の目には、酷いものを目の当たりにしてしまったという驚愕の色がありありと滲んでいた。目を見開いて、上気した頬をしっとりと汗で彩って、紅い唇をわなわなと震わせている。
「い、嫌だ・・・！飲む、なんて！！」
「んなこと言われても美味かったぜ」
べ、と舌を出して、もう跡形もないことを示してくるエクボ。新隆は羞恥と無念さで頭がいっぱいになってしまう。
「なんてはしたないことをするんですか！」
「なんだよ、誠司もしてたろ」
「！」
「なんで俺様は駄目なんだ？」
なぁ？とまた顔を寄せてくるエクボに、目を合わせたくなくて目を瞑り、顔を背ける。

ー新隆のは、甘いからな。また飲ませてくれよ。
ーあン・・・やだよもう・・・。

あの人も実に美味そうに俺をしゃぶって、吸い上げて、飲み込んでいた。いつもやめてというのに、すごく嬉しそうに毎回やるから、すごく恥ずかしかったけどダメって言えなかった。

「おい、こっち向け。目を逸らすな」
「ぐっ！」
顎を掴まれて無理やり正面を向けさせられる。今にも唇同士がついてしまいそうな距離に、エクボの顔がある。だがエクボはそれ以上距離を詰めてこようとはしない。キスをしてこない。
でも、目が真っ直ぐに新隆の蜜色の瞳を見下ろしてくる。片時も逸らされる様子はない。その距離のまま、熱い息を唇に吐かれながら、囁かれる。
「新隆。お前が、好きだ」
「・・・・・・！」
「好きだ、新隆」

「や、やめてください！」
「好きだ」
「やめてぇ・・・っ！」
思わず目を瞑る。震えるまつ毛を辿って涙がするりと目尻から頬を流れ落ちる。止まらない愛の告白を低い囁きと吐息で落とされて、絶頂の余韻と相まって腰が砕け、抵抗ができない。
耳を塞ぎたい。でも手はいつの間にか、エクボに手のひらを合わせて指を絡めるように優しく握られて、前回の荒々しさが全くない。むしろ、温かかった。
ーこんな酷い絆され方があってたまるか。
脳内で冷静に抗議する。だが心は裏腹に、その熱に溶けそうになり形を保つのに必死で、泣きたい。
ーどうしろっていうんだ。なんなんだこれ！
悩み苦しみに打ちひしがれるのは、自分だけ。心の内で暴れる本音と、建前。自分を守るためにこれまでの経緯を裏切ることなど到底できやしないし、したくない。
自分は確かに、誠司を愛していた筈なのだ。
「綺麗だよ、新隆」
口説き落とすようにまた囁いて、左腿の裏に手をするりと這わせて、そのまま膕へと辿り左足を持ち上げる。新隆にも見えるように足首を高く固定して、ふくらはぎに吸い付くような口付けを落とす。そして、見せつけるように新隆の瞳を見つめながら、足袋を固定するこはぜを、ひとつずつゆっくりと歯で噛みついて抜け糸から外してゆく。歯で固定して引っ張り、ふつり。次のこはぜを、ふつり。
「・・・や・・・っ」
4つのこはぜが全て抜かれ、筒がだらしなく口を開き、大切に守り閉じ込めていたくるぶしの膨らみを露わにしてしまう。封印が解かれたその白足袋の鎌に歯を向け淡く噛み、ずるりと引き抜く。引き抜かれた足袋は形を失って、そのまま畳へ力なくはらりと落とされた。
足袋が抜かれて顕になった、生の左足。それはやんわりと白く屋内の光を照り返す。くるぶしからのぞむ腱の隆起が肉の窪みで深い陰

影を落とし、その下に礎として在する踵が儚くもしなやかに丸みを帯びている。なめらかな踵にエクボの形の良い指がそろりと這い、続く土踏まずへの肉の丘陵が優しくエクボの指を誘う。親指で踏みつけの部分を撫でながら４本の指で甲をくすぐって、ヒクリと震える足趾に唇を厚く押しつけて吸いつき、ちゅうと口付けた。それは大切なものを味わうかのように、じっとりと。
エクボには九下部の家の血縁者として、常に比較対象にはされているものの、一般程度以上の知識や雑学はそれなりに叩き込まれて心得のある方だ。この行動の意味が新隆に通じれば良い、などと浅はかなことを考えてその瞳を見つめる。すると。
「・・・左足を・・・！」
ふるふると震える新隆が目に入る。やはりその目は、知っている目だった。こいつ、なかなかどうして知識量がすごい。素直にエクボは感心する。
「左足は・・・既婚の現れだ・・・それを脱がすなんてエクボさん・・・」
「よくご存知で。あと白は浄化の意味を持つ。だから脱がすことで穢してやった」
クツクツと笑い、ギロリと欲に塗れた眼で新隆を睨め付ける。
「誠司の浄化？クソ喰らえ」
「酷いよ・・・！」
「ならなんで抵抗しない？これくらいなら蹴り飛ばせたはずだろ」
ニヤリと笑む顔が、悪魔的なものに見えて心を抉られるようだ。正論を突きつけられて言葉を失う。
「全部俺様が悪いのか？あぁ？」
掴んでいる足の裏をべろりと舌を這わせて舐め上げられて、ビクリと足が跳ねた。
「あっ」
「堕ちろ、新隆」
唸るように呟き左足を解放する。その手ですかさず新隆の体躯を反し、濡羽色に染まる背中が前面に現れる。闇に濡れるその背中に、戒めを施す漆黒の絹の太鼓結びが威風堂々と鎮座して、いかにも挑戦的にエクボの眼に突きつけられる。

脱がせてみよ、できるものならばと。
だがエクボはほくそ笑む。
ーおあいにく様だ誠司よ。まだ脱がさねぇ。
腰をぐいと持ち上げられて、尻を突き出すような体勢を取る形になって新隆は焦る。これはまさか、と冷や汗が喪服の内側を滑っていく。
重力に従い、重く垂れ下がる着物の脚元の合わせから、隙間を縫うようにするりと入り込み、ペニスを思わせぶりに淡く撫で付けて、そこから脚の付け根、太腿へと素早く指を滑らせていく。びくりと震える反応を指先で楽しみつつ、滑り込ませた指が肉に食い込む程の力でじっくりと這い、闇色の布地をたくし上げていく。そのまま張りのある尻肉へと掌が辿り着き、黒の中より現れる豊満な白の双丘がエクボの目を射止めて放さない。
「いっいやだぁ裾が！離して！」
「挿れるために捲ってんだよ、わかんだろ」
ローションを注入されはしたなく涎を垂らすアナルに、ぬちゅうとエクボの怒張があてがわれる。新隆の言葉とは逆にその入り口はエクボの侵入を急くようにひくついて、口付けのように熱く吸い付く。
「やめてください！挿れないで！」
一度破られた操を、再度ぶち破ろうとしてくるその無遠慮な怒張を入り口に感じて、力が入らない中、抵抗するように身体を激しく捩った。もうあんな惨めな思いは最初で最後にしたかった。
そしてここは仏壇の間。九下部家の先祖が代々祀られ、誠司も例外なくその一員としてここに鎮座する。それを証明するかのように、自分が先ほど掃除を終えた際に、彼の遺影を置き直したのだ。
先祖の目の前で、そして最愛だった人の前で、食い物にされてしまう。
「嫌だ！お願いします！あの人の前でこんな！」
「断る。それは俺様が嫌だからな」
ニンマリと笑い、新隆との言葉遊びを楽しむかのように揶揄い、暴れる腰をがしと掴んで、ぐっと力を込められるのがわかった。
白昼堂々、仏壇の間。その身を捧げた誓いの前で、また。

「やめて！やめてください！」
お願い、と必死の涙混じりの哀願が部屋に甘く響く。だがそれは聞き届けられることなどなく。
「いやぁッぁあッーーー！」
抵抗虚しく、再度その秘孔をぬぶうとこじ開けられて、破られる誓いの輪。罪悪感と圧迫感が交互に押し寄せて新隆の胸を抉り、呼吸が浅くなる。
「ッ・・・ぬぃ・・・てッ・・・！」
尻を高く突き出す体勢で畳に突っ伏し、闇色の着物と帯が新隆の呼吸と共に震える。せめて目だけは合わせたくない、顔向けできないと畳に顔を擦り付けている様子が痛々しくも情欲的だ。新隆の涙で畳がじんわりと湿って、その部分だけを濃く色合いを変えてゆく。
「ぇく・・・ぬい、て・・・ぉね、が・・・」
「駄目だ」
きっぱりと拒絶され、たん、と容赦なく抽送を始めるエクボに、新隆の目尻から涙がこぼれ落ちた。
「あぁ！やめ、てぇ！抜いてッ抜いてぇぇ！！」
「だから聞けねえ相談だっつぅの」
無情にも打ち付けられるその杭に腹側の雌の膨らみを刺激されて、蜜色の頭を嫌々と振り乱す。抜けと懇願しても聞いてもらえず、与えられる快楽に腰が甘美な淀みをどんどんと積もらせ、まるで永遠に溶けない水を含んだ重雪のようにずっしりと新隆を縛り付けていく。その快楽を享受せよと、決して触れてはならない凍りつくべき感情を罰として受け入れよと。
「ぁん！ぁあああ！やめてっ、はぁぁ！」

ー受け入れれば、全部楽になるものを。
唐突に瞼の裏に現れる、冷徹な自分。
相談所時代の自分が、脳内で煙草を燻らせている。スーツをゆるく着こなしたそれが、半目で睨め付けてくる。
ー何を今更カマトトぶって。奥様だと？ふざけんな。
はん、と鼻で嘲笑う過去。歩み寄ってきて、顔を覗き込んでくる胡散臭い詐欺師。

ー防衛心理だ。誘拐監禁された女が身を守るために犯人を好きになるやつだ。受け入れてもお前は悪くない。
笑いながら煙草を唇から離し、ふわぁ、と煙を吐く。
ーははは。受け入れろよ。気持ちいいぞ。

（違う！そういう問題じゃ、ない！！）

ぎり、と奥歯を噛み締めて快楽に耐える。だが脳内で囁くエゴに感情を乱されながらも、身体の昂りは止まることを知らずに感度を強めていく。それとともに、足腰の力がどんどんと抜けていく。挿入される前に深い絶頂を2度も強制的に味わされたのだ。もう肉体もそうそう力を留めておけるはずがない。
「あぅう！」
ガクン、ととうとう腰が抜けてしまい、支えていたエクボの手に新隆の体重がかかる。重みを預けられたその光景に少し驚くも、ニヤリと口角を上げて舌舐めずりをする。
「そうか、お前、そういうプレイもしたいのか」
クツクツと笑ってひとりごちて、支えていた腰をゆっくりと畳に下ろす。その間も接合したままだ。
「な、にを」
「気持ちいいらしいぜェ？寝バック」
「？！なん、やめ！！」
ずちゅ、とまた奥に穿たれて思わず畳をガリと引っ掻く。そして先ほどまでの快楽よりも強い衝撃が体内から電流のように巡っていく。
「いや！いやああ！」
図らずも高い声が出る。拒絶の言葉がエクボの愛撫で全て喘ぎに変わってしまう。自分の意図しない方向へと身体を作り変えられていくようで、恐ろしくもその甘さに打ち落とされて抵抗の術を失っていく。
脱力してしまったことで畳に押し付けられた下腹部の内側には、膨らみを持て余した前立腺がある。それをエクボが力任せにぐりぐりとペニスで穿つことで、抵抗できない新隆に確実に絶頂への布石を

強力に打ち付けていく。それに伴いゆらゆらと動く逃げ場をなくしたペニスが畳に擦り付けられて、鈴口から愛液をだらだらとこぼして感度をぐんぐんと高めているのだった。
助けて。
つい、そんなことを考えてしまった。
どうしようもなく快楽に振り回される自分が惨めで仕方なく、こんな形で受け入れてしまう自分が死にたくなるほどに情けなく。
相談所時代は茂夫の超能力をすぐ隣で何度も目の当たりにしてきた。
何か、奇跡を。
思わず仏壇へ伸びる、白く骨ばった左の細腕。
懸命に伸ばす指の先には、あの人の温かく微笑む思い出の顔。
だがその薬指には誓いの指輪はない。
「・・・・・・ッ！！」
顔を涙でぐしゃりと歪めて、大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ち、畳と自分の腕をはたはたと温く濡らす。食いしばったわなわなと震える唇で、熱く燻る身体で、必死に手を伸ばして、現実を拒んだ。
「誠司さん・・・誠司さん・・・！」
助けて、と。
「誠司さん！！」
肉体に穿たれていくその甘さに抵抗をするように、仏壇へ震える手を伸ばし、その笑顔を掴みたくて何度も空を切る。
だが。
「うるせぇんだよ！」
「誠司さ、あっあああぁあ！！」
苛ついたエクボががつん、と前立腺を一際強く穿ち、抵抗虚しく、誠司の名前を呼びながら盛大に三度目の絶頂を迎えてしまったのだった。
腰に蓄積された淀みがこれ以上ないほどに新隆の肉体を快楽で蝕んで、侵食していく。畳には吐き出した精液がねっとりとこびりつき、その目まで白く侵していく。新隆のペニスの先端から白い糸を引いて、重々しい白濁の滴がその糸を伝い、畳にほとりと落下する。その精液は新隆の腹と黒の帯もべっとりと彩り、最早言い逃れ

などできない状況だった。
肉体は二度裏切った。しかも彼の前で。
奇跡は、起こらなかった。
「・・・誠司の名前呼びながらイくとかふざけんなよ」
ギリと歯を噛み締めて怒る様子をあらわにするエクボに、新隆は絶頂の余韻で震える身体をなんとかしたくて呼吸を荒げ、まともに会話をできる余裕がない。
「・・・ぃやッ・・・いやだ・・・っ・・・」
咽び泣くその様子に、エクボは苛立ちを隠せない。
好きなのに、出会ったタイミングと口説いたタイミングが違うだけで、何故こんなにも状況が変わってしまうのだろう。
俺様が先だった。奪われた。
悔しい。自分ならもっと。
「・・・クソ！」
エクボがチッと大きく舌打ちをする。そして泣濡れる新隆に切なく叫ぶ。
「いつまでそんな喪服着てやがる」
「・・・・・・」
「答えろ！」
あまりの怒声にビクン、と身体が震える。だが、言うつもりはない。こんなことを吐き出したところでエクボに理解などされないと分かりきっている。しかし。
「答えなければ、今日の予定を潰してでもここでお前を明日の朝まで抱き潰すぞ」
まだ尻穴に挿入されたままの怒張をぐんと押し付けられて、快楽の余韻に火をつけられそうになる。
「ひ、ッ！」
「いいか、本当のことを言え。俺様には人の嘘がわかる」
誠司の代わりに立ち回る人間として、読心術も強制的に学ばされた記憶は正直うんざりするものだ。だが、今日この時に役立てられるとはつゆ程も思っておらず、少し悔しいがありがたみを感じていた。
新隆も、相談所で所長をやっていた頃は舌戦では負け知らずで、

ジャンケンは絶対に負けなかったり、テロリストを壊滅させるための参謀を押し付けられる程の情報操作力と心理戦を得意としていた。でもこの状況下では脳を働かせるには体力を奪われすぎて、身体に与えられた刺激も大きすぎた。ふらつく頭で、自分はすでに感情に呑み込まれた一人のしがない人間で、奇跡も愛も望めなくなってしまったとただただ絶望を味わい、恋に泣くしかできない立場を憂い、涙を流している。だから多分、これは言うしかないのだ。立場的に自分は、いまとてつもなく弱い。弱すぎた。
嗚咽でいうことを聞かない喉を叱咤して、新隆は無理やりに口を開く。喉に張り付く声が掠れて、吐息のような儚さで小さく紡がれる。
「これ、は・・・誠司が、死の直前に、ッ・・・仕立てて、くれて・・・」
ひぐ、ぐす、と途切れ途切れに言葉を発する。本当は、言いたくない。
「まるで、誠司が、ッぐす・・・自分の死を、わかってた、みたい、に、ッ」
「・・・・・・」
自分に再確認する。本当は言いたくない。言いたくない。言いたくない。惨めな気持ちを吐きたくない。
「俺がっ・・・も、っと、強く、断ってたら、うッ・・・死なずに、済んだ、かも、なのに」
「・・・・・・」
こんなやつに理解されてたまるか。俺だけの気持ちまで、この言葉までお前は犯すのか。
「ッ・・・おれのっ・・・せい・・・だから、この喪服にはっ・・・誠司が、宿ってるんだ・・・」
なんで言わないといけないんだ。なんでお前なんかに。
「・・・・・・」
エクボが声を押し殺して、怒りを滾らせつつも沈黙を貫く。じとりと見られているのがわかるほどに彼の三白眼から届く視線が痛すぎる。その眼差しで焼き殺されてしまいそうだ。
やめてくれ、そんな目で見るな。

「この黒の中で・・・っきっと、迷子になって・・・おれが・・・弔うんだ・・・」
「それが理由か」
「・・・・・・・」
もう嗚咽で言葉が出てこない。こんなこと吐き出すつもりなど毛頭なかった。自分の死後、墓場まで持っていくつもりの心情だったのに。
お願いだから、もうやめてほしい。
「その黒の中に誠司がいるだと？」
静かに降ってくる、低い声。怒りを滲ませつつも、その声はひどく切なく、絞り出すように発せられ、エクボの喉を震わせる。
「ふざけんな・・・あいつはもう死んだ。死人は口無しだ」
「やめてください・・・」
ほら、やっぱりな。理解なんて求めても無駄なのに何故言ったんだ、俺の馬鹿。
「新隆、いつまで死者に囚われている気だ。現実を見ろ」
「やめろって・・・」
誠司はきっと死にきれてない。あんなに俺を愛してくれていた。
「黄泉への案内はやめろ。お前は生者だ」
「やめろってば！」
だからなんだ。彼が贈ってくれた思い出は俺の中に全て生きている。有形無形、全て。
彼の好きな花だって、そこに生けた。
俺の色だと言って嬉しそうに、白と黄色の花々を無差別に全て新隆と呼んで、馬鹿みたいに笑ってたんだ。
二度と会えないんだよ。
ねぇ、もう、一度だって、笑ってくれないの？
「こっちに戻ってこい、新隆」
「うるさい！黙れよお！」
黙ってろよ。俺の生きる意味を邪魔しないでくれよ。
「俺様を見ろ！」
耳を塞いで必死にうずくまる新隆の、喪服の衣紋をガツと掴む。ガクン、といきなり上半身を引き上げられて、その泣き顔をエクボに

晒してしまう。泣きすぎてぼろぼろになった顔を歪ませて「うっ」と呻く。
苦しい。自分に向けられる顔が、こんなにひどい泣きっ面だとは。いつもいつもどうしてこうなるのか。なぜ自分に返されるものは常に悲しいものなのか。
居た堪れなくなり、太鼓結びに手を伸ばしてしゅるしゅると慣れた手つきで解いていく。たちまちのうちに緩くなっていく腹部への戒めに危機感を覚えて、新隆が泣き叫んだ。
「やめろ！脱ぎたくない！それに誠司は」
ぐ、っと唇を噛み締めて、それでも言い放つ。
「あんたが！殺したくせに！！」
「・・・・・・・」
鋭く突き刺さる、新隆の言葉。
耳にキン、と響いて一瞬解く手が硬直する。
そういえばそうだったと思い出す。うっかり忘れていた。
我ながら、なんてひどい虚言を吐いてしまったのだろう。
「・・・ふっ」
自嘲の笑みが漏れる。あぁ、自分はこういうところが駄目なのかもしれない、と唐突に理解した。
これでは、人の愛など、受け取れるはずがなかった。
真実を知り得ない今の新隆にとっては、少なくともエクボが調子づいて吐いてしまったこのひどい嘘が真実なのだった。違うと否定したくとも。
ーダメだろうな、あーあ。
30年以上生きてきて、初めて他人に感じた感情だった。欲しいと、共にいたいと思える温もりを灯してくれたのが、新隆だった。
でも30年以上生きていれば、人が人に与える言葉の影響力もわかる。現実を見過ぎているからだ。
「さぁな？真実は闇の中だからなァ？」
喪服をつんつんと突いて、敢えて煽ってやる。そうだ、その目で睨め。

・・・あぁ、やっぱり綺麗だな。

目の前にあった大切な宝物を横から掻っ攫われて悔しくて、苦渋も山ほど舐めさせられた。だがそれは新隆の事情とは関係ない。そして、誠司の個人的な事情も新隆には本来なら関係のない話なのだ。いくら夫婦の契りを交わしても、極論、肉体を別にすれば他人なのだから。
もう新隆をこれ以上、誠司のものとして見ている自分が許せなかった。だから束縛を解いてやりたい。
その闇の世界から無理矢理に引き摺ってでも取り戻して、希望の光をその身にいっぱいに浴びて、心の底からまた笑ってほしい。
できれば、自分と共に。
それが叶わないなら、せめて。
「堕ちろ」
自分が悪役になって、誠司が新隆に穿った呪いにも似たその腐った愛を、打ち砕いてやる。
ひどい言葉も吐こう。それで新隆が踏み台を持ち、やり直せるのなら。
「いやだ！脱がさないで！お願いだから！」
「いいじゃねぇかこの際。素っ裸晒して誠司に見てもらえよ。その黒色の中でちんこ扱いてオナってるかもしんねぇぜ」
「エクボさん！！」
どんどんと戒めをなくして、肌蹴てゆく喪服。帯が完全に解かれてエクボに投げ捨てられるが、その長い黒布が名残惜しげに新隆から伸びて、畳に黒い道筋を太く描いた。その帯を足蹴にして、新隆から黒を削ぎ落とすかのように帯揚げや帯留めも全て剥ぎ取り、打ち捨てる。
いつの間にか袖を抜かれて、肩に羽織っているだけの状態になっている喪服を、ぎゅうと襟を掴んでわなわなと震える新隆。拘束が無くなった濡羽色の襟が完全に肌蹴け、白い肩とうなじが露出して、そのコントラストにめまいを感じてしまう。だが今はとにかく脱がせたい。
肩甲骨から全身を覆っているだけのその闇を、半衿ごと衣紋をがしと鷲掴みにして、一気にバサリと剥ぎ取った。

「！！」
部屋の中で顕になるその一糸纏わぬ裸体は、悲しくなるほどに色気を纏って白く淡く光り、エクボの目を釘付けにする。日中の室内の少し影を落とした空間の中で、鎖骨が、上腕が、腰骨が、そして背中の、背骨から骨盤へと続くなだらかな丸みの腰の曲線に、泣きたくなるほどの恋しさを胸いっぱいに感じて、思わず背中から抱きついてしまう。
「いや！あぁ！！」
新隆のアナルにはエクボが挿入されたままで、怒張がさらにその質量を増して嬌声が上がる。そして上半身を持ち上げられている状態のため、エクボが新隆を背中から抱き込む背面座位の状態で深く穿たれているのだった。その責め上げられる新隆が正面に見据えざるを得ないのは、仏壇。そして、誠司の遺影。
ガツガツと下から無遠慮に奥まで打ち付けられて逃げ場がなく、擦られる前立腺と突かれる深淵に喘ぎが高く漏れ出して止まらない。
「やっあぁあ！止めて！止めてぇッ！」
「気持ちいいくせに嘘つくな！」
見せつけろ、とエクボが怒鳴って、胸を桃色で彩る乳首をきゅう、と摘んだ。
「あッ！あぁ！」
乳首は前回弄った時に新隆の反応が良かったところだ。だから今回も存分に責め立ててやる。
「やっちくび、やらッ！ぁん！」
「だったらそんな反応すんじゃねぇよ！」
ぐりぐりと押し潰して、引っ張って、先端を指の腹ですりすりと擦って。それが両乳首に同時に施されて、新隆は胸を仰け反らせて高く囀った。
「あっあ！ァン！やッ、はァン！！」
もはや仏壇の前であることも脳内から掻き消えて、与えられる刺激に壊れた玩具の様に小刻みに声が出る。下からの打ち付けと胸の刺激に脳みその回路がバチバチと火花を散らして、四度目の絶頂のために再度全身へと甘美な快楽の痺れを落としていく。そんな体内から犯されるような感覚に、新隆は頭をブンブンと振り乱して甘く叫

び散らす。
「あぁあ！やめてぇ！また！イくッイぐぅう！！」
彼の言葉の通り、ペニスはぎんと一際滾って膨らみを増して、真っ直ぐに天を向いてカウパーをしとどに吐き出しており、アナルの中も打ち付けられるたびに蠢いて締め付けが激しくなってきていた。
「ダメぇっイく！イっちゃう！」
「それなら！」
急に激しかった突き上げが緩くなり、エクボが激しく息を吐きながらゆるゆると律動を弱めてしまう。絶頂へまっしぐらだった身体の衝動を唐突に持て余して、新隆は全身にもどかしさを煮詰めたような疼きをビリビリと感じて、思わずエクボの太腿を爪を立ててがしりと掴んだ。
「うぅううッ！ぐ・・・！ぇ、くぼ、さんン・・・！！」
辛そうに眉頭を寄せて目をぎゅうと閉じる。この後に及んでこの寸止めは流石にひどいと感じてしまう。同意の上ではない行為にしろ、辛いものは辛い。
「辛いか」
「・・・・・・！」
ビクビクと全身を震わせて、背中がぐんと仰け反って、なんとかエクボの怒張を追いかけようと腰がゆらゆらと動いてしまう。嫌なのに感じたい、もどかしい。その相反する気持ちの中で、身体の反応は正直すぎる。
行き場を失った痺れが背筋や腹部、腰をぐるぐるとうねって、神経から犯そうとしてくる。そこまでして絶頂を迎えたいと感じてしまっている、いわば極限状態だった。
だがエクボも相当きついはずだ。射精感を必死で耐えているのは、新隆と同じ男体であるエクボも同様だ。
「イきたいなら」
は、は、と小刻みに息をついて苦痛を和らげながら、エクボが低く囁く。
「俺様のことを好きだと、あいつの顔を見ながら言え」
「っ！そ、そんなの」
「そしたら、イかせてやるよ・・・！」

はは、と笑い、背面座位からまた新隆を四つん這いに這わせて、後背位で突き始める。新隆の目の前にはさっきよりも距離が近く、誠司の笑う遺影が見える。だが今は手を伸ばせる距離にあっても、その胸に抱き留めることができない。
とにかく肉体が、切なくてたまらない。
「やだ！イかせてぇ！イかせてッくださいぃッ！」
「条件は出したぞっ・・・言え！」
やりどころのないこのどうしようもない疼きを煽るかのように、エクボがゆるくゆるく刺激を加えてくるのがわかって、怒りにも似た焦燥感が沸々と沸いてくる。でもそれよりも早く達したくて仕方なくて、たまらないのだ。
「いやぁぁ！イかせてぇぇッ！！」
「言え！言わなきゃやめてやるまでだ！」
唐突に振り下ろされた極限の選択肢。新隆は一瞬耳を疑った。だが、それよりも身体の疼きが半端なく脳内、神経、そのほか全てを支配して、絶頂への強すぎる欲求が爛々と瞼の裏で光を放つ。
やめたいけれどもイきたい。解放したい。
解放したい。イきたい。解放したい。
絶頂をまた迎えて楽になりたい。
脳みそを快楽で満たしたい。
イきたい。

脳が警鐘を鳴らす。
言えない言いたくない誠司が誠司が誠司誠司誠司誠司。
だが、ブツン、と何かが千切れた。

もう、限界だ。

目尻からまた涙を細く溢れさせて、紅潮した頬をつうっと滑り落ちていく。ついに、その荒く呼吸を吐く体温で昂った唇から、甘く切ない願いが、裏切りと共に吐き出された。
「ッぇくぼがぁっ！すきぃいいぃい！！」
脳内で誠司への想いがものすごい勢いで暴れ散らかしている。その

痛みに呼応するかのように身体の疼きが期待で高まり、ぞくぞくと全身を駆け抜けていく。
「言った！イかせてぇッ！エクボぉ！！」
はやく、と息を切らして鳴き叫ぶ様子が、エクボの脳みそを殴りつけるほどに凄艶だった。
「・・・はっ・・・ははは」
乾いた笑い声をあげて、エクボがずん、と激しく律動を再開した。
求めていた強さの愛撫に蜜色の頭を振り、熱い吐息を撒き散らす新隆。その様子は歓喜に満ち溢れて、与えられる快感に全身で悦んでいるのがよく見えた。
欲しかった言葉が貰えた。好きだと言ってもらえた。たとえ脅迫の末に勝ち取った、空な「好き」だったとしても。
「あん！は、あぁ！もっと、お！突いてぇっ！あぁん！！」
一時的な気の迷いだったとしても。
「ぇく！おねがい！もっとはげしく！あんッ！ねぇ！」
やっぱり、好きだ。
「ほしいのぉ！もっとッ！ぁはン！ついてぇッ！ンッ！」
好きだ、新隆。
「イかせてぇぇぇ！」
「ッ！」
新隆の口から吐き出される熱い嬌声に、鼓膜を何度も心地よく陵辱される。あまりの色香に思わず射精してしまいそうになるのをぐっと堪える。
だが遠慮などしない。もういい。
お互いに絶頂が近い。それならいっそあれに吐き出してしまえ。
剥ぎ取った濡羽色の喪服を掴んで引き寄せ、その上質な生地で新隆のペニスを覆い、布地ごとごしゅごしゅと激しく扱いてやった。その感触に新隆が更に高い嬌声を漏らす。眉根を寄せて、睫毛を震わせて快楽を目一杯享受している。
「あぁぁ！なにこれぇ！きもちいいぃッ！」
「そうか、良かったな。そのままイっていいぞ」
「ぅんッン！ンんっ！ぁん！あぁぁ！」
抽送をより一層激しくして、腹側の膨らみと奥を交互にバツンバツ

ンと抉っていく。すでに思考回路を快楽によって完全に手放した新隆が、あ、あ、と小刻みに喘ぎながら、ひたすら自分に身を委ねているこの情景が凄まじく、尊かった。
「あ！イく！イくぅ！イっちゃ、ぇく！！」
「いいぞ、そのままイけ！」
「イく！イっぐぅ！あぁ！」
さっきまで行き場をなくしていた疼きが背筋を通って腰に重く積もり出し、絶頂へと誘うために胎内の奥深くでその質量を急速に増していく。ペニスへの布越しの愛撫も相まって全身の神経に快楽の火花がチリチリと直走って、ぶるぶると震えが止まらなくなってきた。
そこにエクボがとどめとばかりに、ガツン！と強烈に穿つ。その一発が積もっていた疼きを一気に叩き、烈しく全身に爆散していった。
「えくぅッあああぁああッーーーー！」
「あらたか！」
アナルの内部が激しく蠢いて、エクボのペニスから精液をドクドクと搾り取るかのように、強烈な収縮を繰り返す。
「ぅぐ！！」
あまりの強い刺激に驚いて腰が引けてしまうほどで、思わず声が漏れてしまう。
そして、エクボが握り込んだ新隆のペニスは、布越しでもわかるほどにビクビクと跳ねて、喪服の布地が一瞬にしてその質量に濡れ塗れて染み出してしまうほどに、大量にそこに吐精していた。
あぁ、たまらない。
取り残しの無いようにその愛らしいペニスを、ぐちゅん、と強く握り込んだ。
「ッあん！！！」
敏感な亀頭を自身の精液のぬめりで再度布越しに触れられたことで、また色を纏った甲高く鋭い悲鳴が上がって、ビクンと全身が跳ねた。
「新隆・・・」
余韻に身体を震わせるそのアナルから、エクボがグボ、とペニスを

引き抜く。
「はァんッ」
体内から出ていくその感触にも甘やかな痺れを感じてしまい、声が漏れる。そしてその場にがくん、と崩れ落ちるように倒れ込んでしまう。息をしながら力なくエクボを見つめてくる、情欲に塗れ涙を滲ませた蜜色の瞳。そんな壮絶なまでの様相に、エクボはやはり、気持ちを抑えることができなかった。
「新隆・・・好きだ」
仏壇の間に響く、激しい呼吸と低い告白の声。あちこちに投げ出された帯や喪服。そして漂う、事後の残滓の濃い匂い。
昼間だったはずの仏間からのぞく外縁は、もうすぐ夕方に差し掛かろうとしていた。どおりで、部屋が少し、薄暗いと思った。
新隆の目の前に、はらりと落とされる、濡羽色。もう手を伸ばす力もなく、ぼうっと見やる。そして気づく。
「あ・・・っ・・・」
その闇は、白濁の飛沫に塗れ、しとどに濡れていた。乾き切らないそれが重々しくつう、と線を描いて溢れ、垂れ下がっていくのが見えたのだった。
「・・・・・・」
もう、泣くこともできなかった。
ただ、ぼんやりと、そのままエクボを見つめていた。

※※※EntsCatパート※※※

「……強姦に、器物損壊……」
「は？」
犯されて情欲にまだ揺蕩っている白い裸体から、思わぬ言葉が出てきて、エクボは汚れた着物をティッシュで拭く手を止める。
「いい加減、警察にあなたを突き出してもいいんですよ！こんなことは、もう、これきりにしてください。それに窃盗罪も足されたく無ければ、指輪と浴衣を返してください！」
エクボは思わず大笑いしてしまう。
「お前、九下部家をナメてるだろう。ウチは警察にも恩を売ってる

んだぜ？その程度の罪なら、揉み消されて終わりだぞ」
新隆は青くなる。今までただ九下部家の人間に甘やかされて愛されていた新隆には、『九下部家を敵に回したらどうなるのか』など考えてみたことも無かった。
これほどまでに力があって、恐ろしい家だとは、思いもしなかったのだ。
「だが、その気の強さは良い。俺好みだ。ますます気に入った。……この喪服は俺の知り合いにこっそりクリーニングしてもらう。腕は確かだから安心しろ。だが……」
すっと立ち上がってエクボは静かな瞳でひたと新隆を見つめる。
「返ってきた喪服に袖を通すべきかどうかは、良く考えろよ」
どき、と新隆の胸が跳ねる。
「俺の気高い白百合、いつまでも哀しむ愉しみに浸ってくれるな。お前は強い球根花、一度哀しみに枯れても、次の春にはまた大輪の華を咲かせる強さを持っているはずだ」
名家の人間らしい格式のある口説き文句に、誠司を思い出して新隆の胸が跳ねる。
「ちょっと待ってろ。服持ってくるから」
エクボは仏間を慌ただしく出て、どたどたと走って自室に行き、こっそり仕立てていた着物を持ってまた走って仏間に戻ってくる。
「アンタには喪服よりも、こっちの方が似合う」
上品な黒い生地に、控えめだがハッキリとした白百合が、胸元に一本、裾に無数に染め抜かれたその着物は、控えめだが地味すぎず、新隆の華やかさを引き立てるものだった。
「既婚者が、こんな派手な……」
「アンタはもう人妻じゃないだろ」
黙って新隆はエクボを睨む。
エクボは後始末をした新隆に、白襦袢と白半衿を着せて、いそいそと自分好みの着物を着せようとする。
が、女物の着付けは慣れていないのだろう。もたつくエクボに思わず新隆は笑ってしまった。誠司も最初はそうで、義母が着付けてくれたものだった。悔しかったのか、着物に慣れているのもあって、すぐ誠司は新隆よりも先に女物の着付けも覚えたが。

「貸してください。自分で着ます」
テキパキと着付ける新隆に、エクボは所在なさげに頬を掻く。
可愛いところのある人だ、と新隆は思わず思ってしまって、ハッとすぐそれを否定した。
絆され始めている。気を付けなければいけない、とキツく帯を巻きながら思いを新たにする。
エクボが用意した帯は宝相華を咥えた鳳凰が描かれた、格式高い黒地の正倉院文様の帯だった。帯留めも真珠があしらわれた、白く一目で高価だと分かるものである。
「こんな高価な着物、宴席でもないのに着るのは憚られます。すぐ着替えてお返ししますね」
新隆が困ってそう言うと、いい、いい、とエクボは手を振る。
「着替えたけりゃ好きにすりゃいいが、それは俺がアンタのために仕立てたものだ。返す必要はねぇ」
「こんな高価なもの、受け取れません」
戸惑って困る新隆にイタズラにニヤリとエクボが笑う。
「俺の嫁御殿なら、それくらいの着物は身に付けて貰わないとな。これからは政治家主催のパーティーにアンタも俺のパートナーとして出席してもらうんだ。九下部家の格ならそれぐらいの服は着てもらわないと困る」
「……っ！お戯れを……！」
戸惑う新隆をヨソに、エクボは縁側の障子を開ける。
「しばらく換気した方がいいと思うぜ。……じゃあ俺は跡取りの仕事してくるが、寂しくなったらいつでも電話してくるといい」
「……ふざけたことを！」
名刺を新隆の袂にすっとエクボが入れてくる。
満足気にエクボが仏間から退出するのと入れ替わりに、義母が仏間に入ってきた。
「いつまでも仏間の掃除をしてるから心配してたのだけれど、笑窪と話していたのね」
「え、ええ……」
義母は上機嫌に笑う。
「笑窪は気難しくて破天荒でしょう？私も夫も扱いに困っていたの

だけれど、あなたとは気が合うみたいで、良かったわ。夫が言っていたわよ。あなたの名前を出すと大人しく跡取りらしく振る舞うから、助かる、と」
義母は、新隆と目を合わさない。
じわじわと嫌な予感と絶望が新隆を満たしていく。
仏間に漂う淫臭にも、義母は何も言わない。
──嗚呼。
──もう、おそらく、この人は、俺を助けては、くれない。
新隆は哀しくなる。誠司が死んで、笑窪が跡取りになった。
その現実が、色んなものを変えていく。それは仕方の無いことだった。
新隆は妾の道も考え始める。誠司を愛したまま、身体だけエクボに明け渡す。その道の方が、今、新隆が必死に目を背けている道より、心には優しかった。
「白百合は活けなかったのですね、いいと思うわ」
義母から仏花の話を振られてハッとする。
「え、ええ、なんと無く、ですが」
「白百合って、一枚はなびらが落ちたら、つられるようにあっという間に散るでしょう？」
ドキ、と新隆の心臓が跳ねた。身体を散らされたら、心や愛情まで堕ちそうになっている自分を言われたかのようで。
「お掃除が大変じゃない。飾らなくて良かったと思うわ」
朗らかに笑う義母に、新隆は引き攣った笑みしか返せない。
「あ、そうだ、お義母さま、たこやき、ありがとうございます。食べ慣れたものは助かりました」
「？私じゃありませんよ。あなたがそんなものを食べたかったなんて知らなかったわ、気が利かなくてごめんなさいね」
「い、いえ！とんでもないです」
「そんなものを知っているとしたら、笑窪じゃないかしら。あの子は道楽息子でしたから。私から、と言うなんて、あの子も意外と恥ずかしがり屋なのね」
クスクス笑う義母に黙り込む。
何故エクボは、たこやきのことを知っていた？そう新隆の中に大き

な疑問が湧き上がる。誠司とエクボは決して仲のいい兄弟では無かった。誠司がエクボに話したとは新隆には思えない。
ざわ、と新隆の閉じられた記憶が、騒めく。
「あの……誠司さんのことなんですけど」
「はい？」
「誰かに殺された、のではありませんか……？」
訊いてから新隆は後悔する。
が、義母はキッパリと首を振って即座に否定した。
「それだけはありません。九下部家の跡取りですよ？加害者はもちろん調べ上げて裏は取ってあります。……もし仮に黒幕が笑窪だとしても」
新隆は息を呑む。心を読まれたのかと思った。
「九下部家は必ず証拠を見つけ出し、報復します。九下部家の跡取りを殺すと言うことは、それほどのことなのです。……あなたも誰かを恨んで楽になりたいのは分かりますが、笑窪を疑うことは許しませんよ」
「ど、うして」
「分かったのか、ですか？そりゃあ、誠司が死んで一番得をするのはあの子ですからね。ごめんなさいね、本当はあなたより先に、私たちがあの子を疑ったんですのよ。でも、どれだけ調べ上げても、あれは事故でした。笑窪は何もしてません」
新隆は混乱する。恨みの持って行き先が、分からなくなってしまった。
「……あの子は相当、不器用なのね」
義母はぽつりと呟く。
「さ、お仏壇のお掃除は終わっているのですから、もうお休みなさいな。テレビでも見て、お茶でもしなさい」
「……は、い。お義母さま」
混乱したまま新隆は自分の部屋に戻る。
そういえば服についても何も言われなかったな、ともはやエクボの味方になりつつある義母の行動を思い出して悲しくなった。
「誠司さん……」
部屋に戻り、マメだった夫が作っていたアルバムを取り出して、め

くり始める。
最後に行った旅行の写真、デートで行った料亭で２人で微笑んでいる写真。
温かい気持ちになりながら、思い出をたぐっていく。
結婚式の写真まで辿り着き、それをめくると、霊とか相談所でスマホで誠司が自撮りした写真が出てきて、思考が止まる。
満面の笑みの誠司と、営業スマイルの、グレースーツの新隆。
その時の会話が一気に蘇る。
『九下部さんっておっしゃるんですね。珍しい苗字ですね。

あなたで２人目ですよ、私の人生でこんな珍しい苗字！』
新隆はアルバムを文机に置いて、しまっていた霊とか相談所の顧客リストを取り出す。はやく処分しなくては、と思いながらついしそびれていたものだ。
顧客名簿をめくっていくと、すぐ誠司のカルテが出てくる。その几帳面な字に微笑ましく懐かしくなりながらも、頭を振ってさらに名簿をめくる。１０枚ほどめくって。
「……そんな」
荒々しい文字の九下部 笑窪のカルテが出てきて、新隆は絶句した。
エクボとは結婚式が初対面だと思っていたのに。
『なあ、アンタ綺麗だな』
照れる新隆に、ふわりと優しく笑う誰か。
『今度食事にでも行かねぇか？アンタがきっと気に入る店を知ってるんだ。何と店内に……犬を放し飼いにしてる』
その誘いに心を躍らせたのは、誰からのものだったのか。
新隆は混乱する。
「誠司さん……っ」
新隆はすがるように左手の薬指を右手でしっかりと握る。

だが、そこには何も無くて。

代わりに帯留めの真珠が、艶やかに光っていた。

続